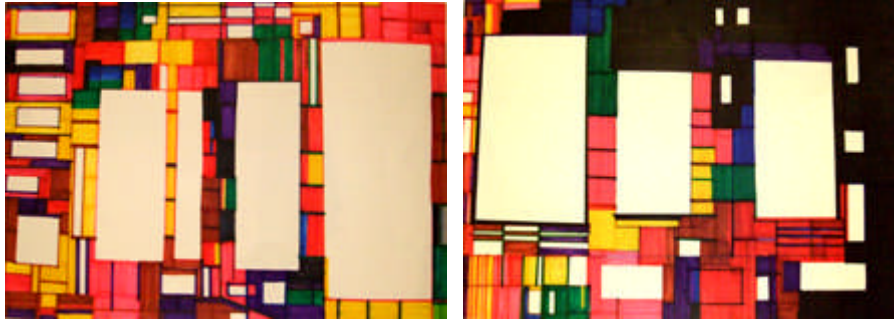


「八重樫季良」 Contemporary Art Brut Vol.4

2011/08/23 - 09/18



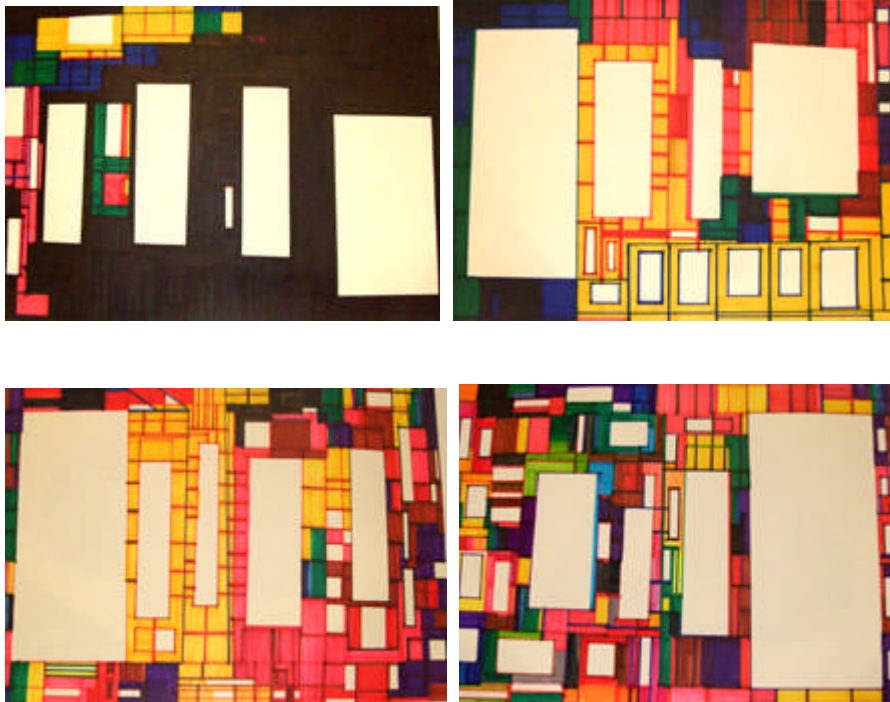
八重樫季良 紙・フェルトペン 380×540mm

八重樫季良の作品の独自性は、フェルトペンという画材と切り離して考えることはできない。混色が難しく、褪色が驚くほど早いという特性のため、フェルトペンが絵画の技法として用いられることは少ない。とはいえ、彼が通うような福祉施設のアートスタジオではそれほど珍しい画材でもない。だが彼は、この画材を与えられた時に凡庸な我々が犯しがちな失敗、パターン化された慣習的なスタイルで動物や乗り物や漫画のキャラクターを書くような失態を、決して演じたりはしない。その代わりに、彼は直線を引き続け、四角形を塗り続けた。定規を当てて直線を引く、これは絵筆やクレヨンには許されない手法だ。

八重樫の作品に我々が引きつけられる場所、すなわち幾万の駄作から彼の作品を隔てるものは、画面に偏在する白い四角形だ。しかし、この四角形は塗り残された下地の色であって、正確に言えば描かれたものではない。彼はこの白い四角形を描き出したかったのか、あるいはどうしてもこの場所だけは塗りたくなかったのか。いずれだとしても、それは大きな問題ではない。すべての視線を吸い込むかのようにぽっかりと口を開けた虚の空間は、確かにそこに存在する。彼は、あたかも刃物で大理石から像を削り出すがごとくに、フェルトペンの一撃一撃を振り下ろすことでこの驚くべき空虚を現前させた。一撃というにはあまりに心許ない道具だが、白という色彩を持たないフェルトペンだからこそ、このような空白の表現が可能となったのだ。これは、最も描かなければならないものが、描かないという禁欲によって実現された、何ともシニカルな作品である。

[服部 正](#) (兵庫県立美術館 学芸員)

服部氏寄稿文 [「RAW VISION」](#) アウトサイダー・アート/アール・ブリュット専門誌



八重樫季良 紙・フェルトペン 380×540mm

八重樫は1956年、岩手県北上市に生まれました。

現在は花巻市の知的障がい者支援施設「ルンビニー苑」で生活しながら、るんびにい美術館のアトリエで精力的に制作活動をしています。八重樫は幼いころ、定規を使っていくつもの直線を交叉させて描く絵画を、誰に教えられるでなく描き始めました。

始めは鉛筆で線を格子状に引くだけの、シンプルな画面であったようです。そこにやがて色彩が加わり、単純な格子の形は徐々に複雑に入り組み始め、画面は大きく発展していきました。

しかしその骨格を成すのは一貫して線と色彩、ただ二つだけの要素です。

一見抽象画に見える八重樫の作品ですが、実は具象画の側面もあわせ持っています。

10年ほど前まで集中して制作された「自動車」を描いたシリーズでは、格子状の色彩の中に、よく見ると運転手が描かれているのがうっすらとわかります。また現在の作品も、「建物」の絵としてスタートしたシリーズです。

鉛筆で格子を描き始めてから半世紀を経た現在まで、作品はその骨格を変えることなく、ひたすらにおびただしいバリエーションとして生み出され続けました。無数の直線で区切られた細かな空間を、色とりどりの美しい色彩で埋め尽くした作品群。それは線と語り、色彩と語る果てしない会話のようです。あるいは八重樫は線と色彩を通して、自身の命の声と対話していると言えるかもしれません。最小の始まりから無限が生み出される。その様相は、あたかも一つの始まりから宇宙のすべてが生まれたことに似ていなくはないでしょうか。命が何かを生み出すとき、そこには永遠と無限が透けて見えるように思われます。

[\(るんびにい美術館 あたらしい展覧会 05.06 抜粋\)](#)